

第十二講 更級日記

次の文章は『更級日記』の一節で、地方にいた折から『源氏物語』を読みたいとあこがれていた作者が、上京して十四歳のとき、やつと全巻を手にした際のことなどを、後年回想したものである。これを読んで、後の問に答えよ。

かくのみ思ひくんじたるを、心も慰めむと、心苦しがりて、母、物語

などもとめて見せ給ふに、げにおのづから慰みゆく。※紫のゆかりを見て、

続きの見まほしく覚ゆれど、人かたらひなどもえせず。誰もいまだ都なれぬ

ほどにて、え見つけず。いみじく心もとなく、ゆかしく覚ゆるままに、

「この源氏の物語、一の巻よりしてみな見せ給へ」と、心の内に祈る。親の

※太秦に籠り給へるにも、異事なく、このことを申して、出でむままにこ

の物語見はてむと思へど、見えず。いと口惜しく思ひ嘆かるるに、をばなる

人の田舎よりのぼりたる所にわたりたれば、「いとうつくしう、生ひなりに

けり」など、あはれがり、めづらしがりて、帰るに、「何をか奉らむ。ま

めまめしき物はまさなかりなむ。ゆかしくし給ふなる物を奉らむ」とて、

源氏の五十余巻、櫃に入りながら、在中将、とほぎみ・せり河・しら

ら・あさうづなどいふ物語ども、一袋とり入れて、得て帰る心地のうれし

さぞいみじきや。はしるはしるわづかに見つつ、心も得ず心もとなく思ふ源

氏を、一の巻よりして、人もまじらず、几帳の内にうち伏して、ひき出で

つつ見る心地、^⑧後の位も何にかはせむ。

1000-04-04

(注) ※紫のゆかり：『源氏物語』の「若紫」の巻など。

※太秦：京都市右京区太秦にある広隆寺。

※在中将：在五中将で、『伊勢物語』のことか。

※とほぎみ・せり河・しらら・あさうづ：どれも現存しない物語。

問一

傍線②③⑥の意味として最も適当なものを、次のそれぞれのア～オの中から選べ。

② 「心苦しがりて」

ア 難儀で大変だと思って イ 相手にすまないと思って
ウ つらくて胸が痛くなって エ 気がかりで大切なことに思っ
オ いじらしくかわいそうに思っ

③ 「ゆかしく覚ゆる」

ア 欲しいと思う イ 懐かしく思われる
ウ もどかしいと思う エ 見たい知りたいと思う
オ 上品なので心ひかれるように思っ

⑥ 「まめまめしき物」

ア 堅苦しい物 イ 実的な物 ウ 趣味的な物
エ 子供っぽい物 オ こまごまとした物

問二

傍線①「心も慰めむと」、傍線⑤「帰るに」のそれぞれの主語を、次のア～オの中から選べ。

ア をば イ 作者 ウ (世の)人 エ 親 オ 母

①

⑤

問三 傍線④「このことを申して」とは、どういうことをいうのか。最も
適当なものを次のア～オの中から選べ。

- ア 作者が親に『源氏物語』を探してほしいと頼んだ
- イ 作者の親が作者に、お前の願いを祈って上げると言った
- ウ 作者が太秦の仏に、『源氏物語』全巻を見せてほしいと祈った
- エ 作者が親に、太秦の仏に自分の願いを祈ってほしいと頼んだ
- オ 作者の親が太秦の仏に、作者の願いをかなえてほしいと祈った

問四 傍線⑦「ゆかしくし給ふなる物」の文中の「なる」の文法的説明と
して、最も適当なものを次のア～ウの中から選べ。

- ア 動詞「なる」の連体形
- イ 断定の助動詞「なり」の連体形
- ウ 伝聞・推定の助動詞「なり」の連体形

問五 傍線⑧「後の位も何にかはせむ」とは、どのような気持を言ってい
るのか。簡潔に説明せよ。

問六 『更級日記』と同じ平安時代の日記文学に、次のBCDの作品がある。
これらを成立の早い順に並べるとどうなるか。正しい順序のものを
次のア～オの中から一つ選べ。

- A 更級日記
- B 蜻蛉日記かげろうにつき
- C 土佐日記
- D 紫式部日記
- ア ABCD
- イ CDAB
- ウ CBDA
- エ BDAC
- オ BCAD

	父	作者
上総国 (千葉県)	48歳	13歳
↓ 12年が経過		
常陸国 (茨城県)	60歳	25歳

日記

【平安】

土佐日記 紀貫之 935

最初の仮名日記。日記体による紀行文。

土佐の守(国司)の任期(任命されたのは930年60歳の時、任期は4年)を終えた紀貫之が承平四年12月21日土佐の館を出発し、翌年の935年2月16日に京の自宅に帰り着くまでの55日間の船旅日記。女が書いた形にして仮名文を用いた。文章の中で「あるじ・ある人・船君・父・翁」と出たら作者。冒頭は「男もすなる日記といふものを女もしてみむとてするなり」。任地土佐でなくなった愛児(娘)への悲しみ・船旅への恐怖・帰京の喜びなど。

蜻蛉日記 藤原道綱母

975頃

藤原兼家妻。藤原倫寧女。

最初の女性日記文学。↓苦悩に満ちた21年間の嫉妬が中心の日記

20歳の頃に当時、右兵衛佐であった藤原兼家に見初められ結婚。愛人、町の小路の女、他7人に傾く夫、妻としての苦悩、我が子道綱(スーパーマザコン)へのひたむきな愛情。その詳細な心理描写は後の『源氏物語』にも影響を与えた。

和泉式部日記 和泉式部

1007

和泉式部と帥宮敦道親王との恋愛日記を物語的に描いている。

主人公である和泉式部が第三人称(女)で書かれている。基本的に尊敬語が使われていたら、主語は男⇨敦道親王、謙讓語が使われていたら主語は女⇨和泉式部。

紫式部日記 紫式部

1010

中宮彰子(上東門院)に仕えた宮廷生活の見聞録。彰子の土御門殿(道長の邸)での初出産、宮廷の生活や儀式。前半は記録文、後半は消息文(⇨手紙文)。和泉式部、赤染衛門、清少納言の人物批判。cf. 彰子の父は藤原道長、夫は一条天皇。

更級日記 菅原孝標女

1058

約40年の生涯の回想記録。13歳の時、父の国司の任期が終わり上総(千葉)を出発し上京する旅路、源氏物語を愛読した娘時代の生活、結婚生活、51歳になり夫と死別しさびしい境遇を述べて終わる。

いとほし

こころぐるし【心苦し】

気の毒である

むべ

うべ

げに

なるほど・本当に

おのづから

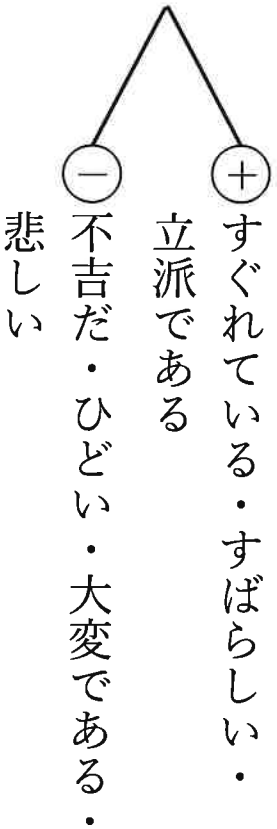
① たまたま・万一・ひよつとして

② 自然に

えー打消
くデキナイ

いみじ

① たいそう



② (程度を表し) たいそうく・とてもく・

ひどくく

うしろめたし
おぼつかなし

こころもとなし

不安である・気がかりである

こころもとなし

①不安である・気がかりである

②じれったい・待ち遠しい

③はつきりしない

ゆかし

①見たい

②聞きたい

③知りたい

④心ひかれる

くままに

①くにつれて

②くとすぐに

③くので

④くにまかせて

⑤くと同時に

いと

たいそう・とても

あたらし
くちをし
くやし
ほいなし
をし

残念である

うつくし
かなし
らうたし

かわいい・かわいらしい

にき (し・しか)
にけり (ける・けれ)
にたり (たる・たれ)
の「に」は完了

〈謙讓〉

たてまつる (奉る)
まゐらす (参らす)

本 差し上げる・献上する
補 く申し上げる

あだなり

あだあだし

① はかない・頼りない

② 浮気である・不誠実である・浮ついている

③ 役にたたない・つまらない



まめなり

まめまめし

まめやかなり

① 誠実である・まじめである

② 実用的である

まさなし【正無し】→マイナスイメージ

よくない・不都合だ

《ハイレベル》

四段・上一段は終止・連体が同形なので伝推か断定か区別できない。そこで前後から意味を決めないといけないが、ここはとりあえず三つ覚えよう！

○ (終止・連体同形) + **なる** + 体言 ↓ 伝聞推定

・ 籠手とかやいふ 同形 伝推 **なる** 物を(「いふ」は四段活用動詞で、終止形も連体形も「いふ」)

・ 心恥づかしき人住む 同形 伝推 **なる** 所にこそあなれ(「住む」は四段活用動詞で、終止形も連体形も「住む」)

○ 〈音・声〉—— **なり** ↓ 伝聞推定

・ しばしありて、先たかう追う声すれば、殿、参らせ

給ふ 同形 伝推 **なり**「とて

○ ぞ・なむ・や・か——同形 **なる** ↓ 伝聞推定(「こそ同形なれ」の「なれ」も伝推)

・ 文箱に入れてありと **なむ** 同形 伝推 **いふ** 同形 伝推 **なる**

cf. 形容詞の補助活用の連体形 + なり ↓ 伝聞推定

・ 美しかる **なり** (伝推) ⇕ 美しき **なり** (断定)

※「なり」を伝聞と推定に分けるといふ問題はあまり出ないが、もし出たらこう覚えてくれ。

「なり」の前後の事件(音・声)が近ければ推定・遠ければ伝聞

推定

・秋の野に人待つ虫の声す(なり)

↓近くで虫の声がしている↓近い

(||秋の野に人を待つという松虫の声がしているようだ)

伝聞

・かかる人こそ昔物語もす(なれ)と思ひ出でらる

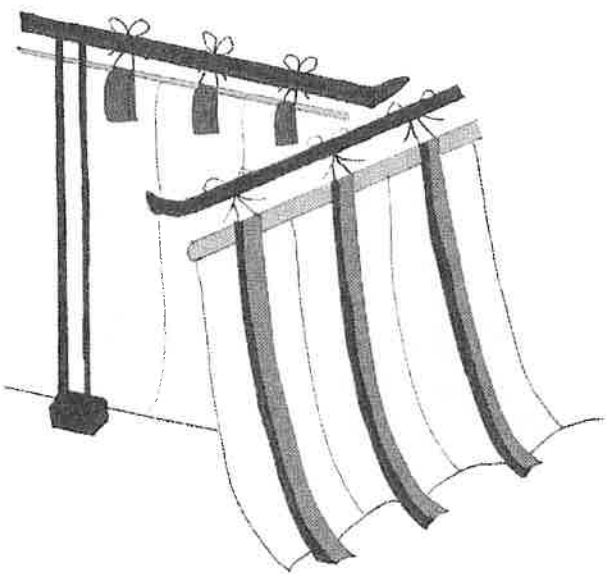
↓このような人||身近でない・「昔物語」ともある。
ようするに誰かの噂を伝え聞いているわけ↓遠い

(||このような人こそ昔物語をするといふことが思い
出されて)

「や」と言ったら疑問か
反語（係助詞）か詠嘆（間投助詞）

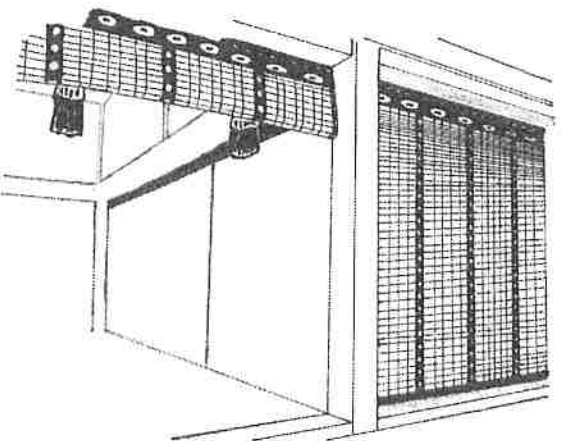
几帳きちょう

移動式カーテンで、部屋を仕切るときに使う。男性との間を隔てた。



御簾みす（簾すだれ）

外から部屋の中が見えないようにたらすカーテンのようなもの。御簾越しに、男性が女性を垣間見する場面がよく見られる。



やは
かは

反語（ごくたまに疑問のときもある）

なににかはせむ 【何にかはせむ】

何になろうか、いや何もならない

このように（私は悲しい）思えばかりしてふさぎ込んでいるので、「（私の）心を慰めようと」気の毒がって（Ⅱ気をつかつて）、母が、物語などをさがして見せてくださるので、本当に自然となくさめられていく（または、心がさめていく）。（源氏物語の）若紫の巻の部分を見て、続きが見たいと思われるけれども、人に相談することができない。（↓何を相談することができないんだ？『源氏物語』の入手方法についてだぞ！）。（家のものは）誰もまだ都に慣れていない頃であって、見つけることができない（Ⅱさがし出す事ができない）。たいそうじれったく、見たく（または、読みたく）思われるので、「この源氏の物語を、一の巻からして（Ⅱをはじめとして）すべてお見せください」と、心の中で祈る。親が太秦（の広隆寺）に籠もりなされた（とき）にも（私も一緒に同行し）別のことなく（別のことなくというのは、他に願うことなんかなくということ）、このこと（Ⅱ源氏物語を読みたいということ）（だけ）を（祈り、または、お願い）申し上げて、「（お寺を）出たらすぐに源氏物語（を見つけ出して）見終えよう（または、見終えることができるだろう）」と思うけれども、見つけ出すことができない。たいそう残念に思い嘆くうちに、おぼである人（これが、『蜻蛉日記』の作者の藤原道綱母かな？）と言われている（が田舎（地方）から上った（Ⅱ上京した））ところに私が行ったところ、（次はおぼのセリフだよ）「たいそうかわいらしく成長したねえ」など感動し、珍しがって、（私が）帰る（とき）に、「何を差し上げましょうか。実用的なものは、きつとよくないだろう。見たい（または、読みたい））と思っただけなら、（私が）差し上げよう。見たい（または、読みたい）」と（言っ）て、源氏の五十余巻、櫃に入れたままで、（それに加えて）在中将（Ⅱ『伊勢物語』）、とほぎみ、せりかわ、しらら、あそうづなどという物語、あれこれを、一袋に取り入れて（くださりそれを）もらって帰る気持ちのうれしさは大変なことであるよ。胸をわくわくしながら、（いままでは）やつとのことで見ても（または、ほんの一部を見ては）、わけもよくわからず（何で？ だいたいのストーリーしかわからないから）じれったく思っていた源氏物語を、一の巻（Ⅱ桐壺の巻）をはじめとして、他人に邪魔する人もなく、（一人）几帳の中で寝そべって（櫃から）引き出しては見る気持ちは、後の位も何になるうか、いや何にもならない。